

本願における唯除——善導の解釈——

経 隆 優

唯除の文に対する親鸞の領解に最もその影響をあたえているのが曇鸞および善導の唯除の文に対する解釈である。そこでいま特にその善導が唯除の文をいかに領解しているかを考察したい。善導のその領解は『散善義』において『観経』下々品の文を解釈しているところに窺うことができる。そこに善導は本願に「唯除五逆誹謗正法」とあることについて「此の義仰いで抑止門の中に就て解す」と、まずそれを領解する基本姿勢を示し、本願に逆誹が唯除されていることをその罪の障が極重であるため衆生がその罪を造ることを恐れ、造らせないための抑止であつて、「亦是攝せ不るに不ざる也」と、それは決して逆誹者の不往生・不攝を意味するものではないとしている。従つて下々品の五逆得生の経説に対し「其れ五逆は已に作れり、捨てて流転せしむべからず。還て大悲を發して攝取して往生せしむ」とし、また誹法罪についても「若し造らば還て攝して生を得しめん」と、逆誹とともに如来の大悲心によつて攝取され往生を得るとしている。善導はこのよううに本願における逆誹の唯除は決してその不攝を意味するものではないとし、そしてその逆誹の罪について未造業抑止、已造業攝取という領解を示している。しかるに、この未造業・已造業といふことを未だ罪を造らない者とか、已に罪を造つたとかといふ

いわゆる倫理的範疇でとらえようとすると、衆生が逆誹の罪を造つても如来の大悲心によって攝取されるならその罪の未造者に唯除逆誹と抑止する必要はなく、また未造者に対し抑止するなら已造の者は当然唯除されなければならないという論理の矛盾がある。その意味で未造業・已造業にはもっと深い意味があらねばならず、もつと異った視点からみなければならぬ。

そこでいま善導が『法事讚』において「誹法闡提、廻心すれば皆往く」と語っていることを視点にしてその未造業・已造業の意味を考えてみたい。すなわち、この誹法も闡提も廻心することによってみな往生を得るという『法事讚』の文にてらすならば、抑止される未造業とは、未だ逆誹の罪を造らない者という意味ではなく、自身が逆誹存在であることを未だ内觀しない未廻心の機であり、攝取される已造業とは、已に逆誹の罪を造つたという意味でなく、自らの逆誹性を深く内觀自覺した、いわゆる廻心の機を意味するものと考えられる。なぜならば、逆誹という自身の存在性に根ざした罪の自覺においてはじめて如來の攝取不捨の大悲心が仰がれ、その罪の自覺のないところに逆誹者をも攝取する如來の大悲の願心を感じしるはずがないからである。善導のいう未造業・已造業とは、このように宗教的体験を課題とする廻心の問題であつて、未廻心の機、廻心の機を意味すると考えられる。つまり、それは逆誹の罪の自覺の有無を問う、自覺の問題であつて、決して未だ罪を造らないとか、已に造つたとかいう罪の有無を問題にするものではない。

このように善導の未造業・已造業が廻心を課題としたものであることが明らかになることによつて、善導が本願における唯除を自身の存在性に無自覺な衆生をして、その自性ともいふべく逆誹

性を自覚せしめ、廻心を促す契機とうけとめていたと領解できる。そして衆生はその唯除が促す廻心の事実において、逆誘を攝取する如來の大悲心を感じ得することができるが故に、「但如來其れ斯の二の過を造らんを恐れて、方便して止めて往生を得ずと言えり。亦是攝せざるにあらざる也」と、本願の唯除が未造業の者に対する抑止であつて、決して逆誘者の不攝を意味するものではないとしているのであろう。

では、このように唯除逆誘が不攝を意味するものではないとする善導の領解の基盤がどこにあるかを次ぎに考えてみたい。そこにはまず思われることは、善導は五逆得生を説く『觀經』の立場にたつて唯除の文を解釈せんとしているということである。そしてさらには曇鸞の逆誘の問題に対する領解の影響が考えられる。すなわち曇鸞も『論註』上巻の八番問答において徹底して誹法不生と強調しているのであるが、下巻の心業功德釈下の文にいたつて、その誹法罪の者もひとたび阿弥陀如來の至徳の名号・説法の音声を聞くなら、遂に如來の家に入ることを得ると、誹法罪の者も如來の本願に救済される旨を示している。つまり曇鸞も誹法不生は強調しているが不攝とはいっていなく、そのことからの影響が考えられる。しかるに単にその影響をうけての解釈ではなく、そこには善導自身の深い宗教体験があるにちがいない。すなわち二種深信は善導自身の信仰体験の表白といつていいと思うのであるが、その表白のうちに善導自身の非常に深い唯除の自覺を窺うことができる。そこに善導は、唯除の自覺を「自身は現に是罪惡生死の凡夫、曠劫より曰來、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」という機の深信として表白し、その逆誘の自覺において感得されてくる如來の攝取不捨の大悲心を「彼の阿弥陀仏の四

十八願は、衆生を攝受して、疑無く慮無く彼の願力に乗じて定んで往生を得と信す」という法の深信として表白している。従つて、ある意味では善導の二種深信は本願の唯除の文からひきかれてきた世界といえるだらうし、そしてそこに善導が唯除の文を自身の課題としていかに主体的に問うていったかを窺うことができる。

最後に、このような善導の唯除を契機としての逆誘の自覺、廻心によってすべての衆生が如來の大悲心に攝取されるという領解が、親鸞の唯除の文に対する領解にどのように受容されてきているかを考えてみたい。

親鸞は信巻に逆誘攝不の問い合わせたて曇鸞および善導の解釈を引用しながら、そこには自らの領解を語らずに、『尊号真像銘文』に「唯除」というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり」と唯除の文に対する領解を示している。この「十方一切の衆生みなもれず往生すべし」という領解こそ逆誘者も廻心することによって如來の大悲心に攝取されるという善導の解釈によつてなされてきたものであろう。

実際に如來は、十方衆生に自己の罪惡なることを知らせ、廻心させんがために「ふたつのつみのおもきことをしめして」唯除逆誘と誓つてゐるのである。廻心とは『唯信鈔文意』に「自力の心をひるがえし、するをいうなり」とあるように衆生が自己をたのむ心をして他力の信に帰すことであるが、衆生は自らはできず、衆生をして廻心せしめるものこそ如來の大悲心である。従つて、ここにこの本願における唯除こそ如來の攝取不捨の大悲心の具体的・積極的なあらわれ、表現とができる。